

令和5年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査における

北九州市立 くきのうみ 小学校の結果分析と今後の取組について

スポーツ庁による「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」について、令和5年6～7月に、5年生を対象として、「体力・運動能力」と「運動習慣等」についての調査を実施いたしました。（熱中症等の予防の観点から、20mシャトルランについては、5月中旬から6月上旬に実施しています。）

この度、本年度の調査結果を分析し、今後の取組についてまとめましたので、お知らせいたします。

本結果は、学校の現状を知っていただくとともに、ご家庭での取組の参考にしていただきたいと思います。また、運動習慣については、学校のみでなく、家庭で運動を一緒に「する・みる・話す」ことが大切です。本校では、運動習慣の確立と授業の充実により、総合的に体力の向上を目指しています。ご家庭でも運動習慣の確立に向けた取組の充実をお願いします。

※ 本調査により測定できるのは、体力・運動能力の特定の一部分です。

1. 調査の目的

- (1) 国が全国的な子供の体力の状況を把握・分析することにより、子供の体力の向上にかかる施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- (2) 各教育委員会が自らの子供の体力の向上に係る施策の成果と課題を把握し、その改善を図るとともに、子供の体力の向上に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。
- (3) 各学校が各児童生徒の体力や運動習慣、生活習慣等を把握し、学校における体育・健康等に関する指導などの改善に役立てる。

2. 調査内容

(1) 実技に関する調査

〔8種目〕 握力、上体起こし、長座体前屈、反復横とび、20mシャトルラン、50m走、立ち幅とび、ソフトボール投げ

(2) 質問紙調査

運動習慣、生活習慣等に関する質問紙調査

3. 体力・運動能力に関する調査結果の概要

全国・本市・本校の実技調査の結果

＜男子＞

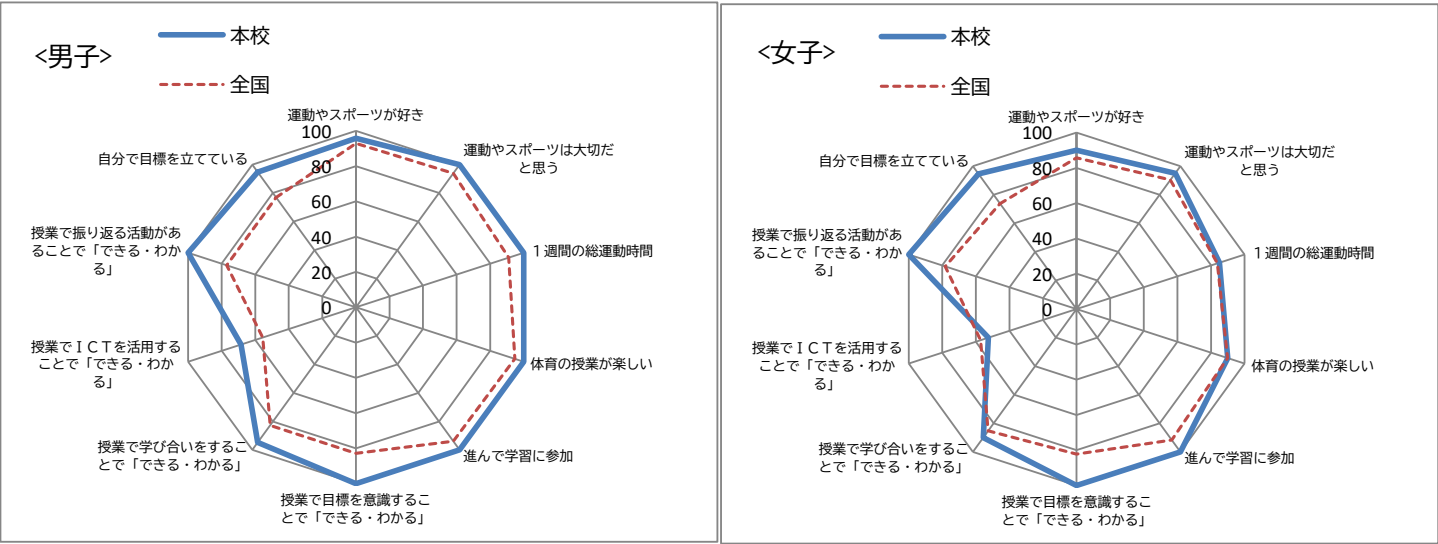
本年度の結果	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ソフトボール投げ	体力合計点
全国	16.13	19.00	33.98	40.60	46.92	9.48	151.13	20.52	52.59
本市	16.30	19.17	34.49	40.75	49.29	9.48	152.47	21.39	53.38
本校全国平均以上の種目									

＜女子＞

本年度の結果	握力	上体起こし	長座体前屈	反復横とび	20mシャトルラン	50m走	立ち幅とび	ソフトボール投げ	体力合計点
全国	16.01	18.05	38.45	38.73	36.80	9.71	144.29	13.22	54.28
本市	16.35	18.36	38.88	38.78	39.26	9.70	145.97	13.51	55.18
本校全国平均以上の種目									

4. 運動習慣や生活習慣等に関する質問紙調査結果の概要

質問紙調査レーダーチャート



質問紙調査の結果分析
○ 多くの子どもが運動が好きで、体育科の授業が楽しいと考えていました。また、体育科の学習において、自分なりの目標をもったり、友達と協力して学習したりしていると回答した子どもが多くいたことから、意欲的に体育科の学習に取り組んでいることがうかがえます。
○ 学校の体育科の授業以外で運動している時間が比較的に長く、日常的に運動を継続する習慣が身に付いている子どもが多いことが分かりました。
○ テレビやスマートフォン等のメディアを扱う時間が全国平均値と比較してとても長く、睡眠時間が短い傾向にあることから、メディアの適切な使い方や生活習慣の改善について指導する必要があると考えられます。

5. 調査結果から明らかになった、課題解決のための重点的な取組

① 教科(授業)に関する取組(全校で・学年で・学級で)

- 専科・持ち合い授業を通して、子どもが「できた」と感じられる質の高い体育科の授業づくりを継続します。
- 体育科の保健領域の学習や学級活動等において、自分の生活習慣を見直し、よりよく改善していこうと考えることのできる活動を計画的に実施しています。
- 各学年の新体力テストの結果を分析し、課題と考えられる運動領域を明らかにしました。分析結果を生かし、日々の体育科の授業の準備運動等で、各学年で向上させたい運動領域に関連する動きや体操等を積極的に行っています。

② 運動習慣等に関する取組(1校1取組)

- 全校的な課題であると考えられる運動領域について、児童会を中心として、体力を向上させるイベントを継続的に行っています。(中休みに運動場で持久走を行うチャレンジランニングや、昼休みに体育館で行うボールを使った当てゲーム等)
- テレビやスマートフォン等の上手な使い方、よりよい生活習慣の形成の仕方等について、子ども自身が考え実践できるような指導を継続していきます。